

令和2年度人生二毛作推進県民会議 要旨

日 時：令和3年2月2日（火）13：30～15：20

場 所：長野保健福祉事務所3階

1 事例発表

(1) **事例1** スマートフォンセミナーについて

○ 発表者

- ・ソフトバンク株式会社地域CSR2部参与 千野 敬子 氏
- ・公財団法人長野県長寿社会開発センターシニア活動推進コーディネーター
（伊那支部）藤井 佳代 氏、（飯伊支部）今村 光利 氏、（本部）戸田 千登美 氏

○ 内容

- ・スマートフォンセミナーを開催しようとしたきっかけは？

→（戸田シニア活動推進コーディネーター）

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、今年度は、シニア大学を1年休講とした。専門コースの講師である県外大学の先生から「ぜひシニアと、うちの大学生とをオンラインで、対話の場『おしゃべり学校』をやらないか」という提案をいただき、シニア大学専門コースのOBに呼び掛けをしたところ、多くのシニアが、「オンライン（Zoom）に関心はあるけれど怖い、ダウンロードをしたら有料になってしまうのではないか」などの不安（ハードル）を感じている。

私自身は、オンラインを打合せに活用し始めていて、非常に便利だと実感していた。長野にいながら東京の講義を受講できることや、足が悪くて外出できない高齢者の学びにも広がるのではないかと思います、シニアの皆さんにきっかけがつかれないかと長野県と包括連携協定を結んでいる通信会社はないか県の担当者に相談したところ、ソフトバンク(株)千野さんをご紹介いただいた。

- ・セミナー開催に当たって工夫した点は？

→（戸田シニア活動推進コーディネーター）

千野さん（ソフトバンク(株)）には、セミナー開催の目的、お互いの考えをすり合わせるため、事前打ち合せ入念にした上で、セミナーを開催する長寿社会開発センター各支部の担当者 と千野さんにもご参加いただき打合せをした。

- ・千野さんは、どのような立場で、どんな役割を果たされましたか？

→（千野氏（ソフトバンク(株)））

ソフトバンクは、長野県との包括連携協定において、「いきいき安心して暮らせる社会づくりに関すること」が連携事項にありますので、長野県と長寿社会開発センターからご依頼を受けまして、スマホセミナーを企画させていただきました。

- ・ソフトバンク(株)のセミナーの特徴は、どのようなものですか？

→ (千野氏 (ソフトバンク(株)))

通常の講演というような講師が一方向的に話すものではなくて、デモ機を貸出しして、参加者が使いながら講座を受ける体験型講座を開催しています。参加者は、スキルにばらつきがありますので、大体 10 人に 1 人ぐらいサポートスタッフを入れさせていただいて、講座の途中で分からなくなっても、手を挙げればサポートスタッフが声を掛けて一緒にお手伝いをしながら進めていく体制になっています。

- ・シニアの中には、SNS に詳しい人もいれば、初心者の方もいます。カタカナ言葉が分からないという人も多いと思いますが、どのようにケアしていますか？

→ (千野氏 (ソフトバンク(株)))

スマートフォンを持ったことがない方は、横文字が出てくると抵抗感が出てしまうように思います。スマホアドバイザーという社内資格を持っているスタッフが講師をしていますので、例えば、タップと言わずにちょっと触るというような表現を使いながら、シニアの皆さんに伝わりやすい表現を使っています。

- ・SNS は便利だけれど危険性もありますよね。その辺もセミナーで、教えていただけるんですか？

→ (千野氏 (ソフトバンク(株)))

今回、長寿社会開発センターにご依頼いただきましたセミナーでは、基本講座以外に Zoom や LINE の使い方、アプリの落とし方、セキュリティーについて、無料 Wi-Fi を使って大丈夫なのとか、「ギガ」って何というところも加えてセミナーを行いました。

- ・今回のセミナーは、県下何箇所で開催しましたか？

→ (千野氏 (ソフトバンク(株)))

1 月の時点で 22 回開催して、350 人にご参加いただきました。

- ・アンケートによると 75%の方が満足とありますが、この結果をどのように見えていますか？

→ (千野氏 (ソフトバンク(株)))

セミナーを他の方に紹介したいという内容で、75%の方から支持をいただきましたが、どちらでもないというような回答の方は、家族とか、もう周りにスマホを持っていて、既に使いこなしているから、との理由でしたいので、ほぼご満足いただけたのではないかと感じています。

- ・今後やってみたいことは？

→ (千野氏 (ソフトバンク(株)))

弊社に Pepper というロボットがおりまして、Pepper を使ったプログラミングの教育を県内の小中学校で取り入れていただければと思っています。ぜひ、シニアの皆さんにもご体験いただいて一緒に地元の子どもたちにプログラミングを教えながら、何か社会課題の解決につなげていくというようなことができればいいなと思っています。

- ・次に、伊那支部の藤井シニア活動推進コーディネーターをお願いします。今回のスマホセミナーをきっかけに「伊那シニアズーム倶楽部」を立ち上げたとか？

→（藤井シニア活動推進コーディネーター）

スマホセミナーの反応は、とても良かったです。その中でも特に4割の方が、ビデオ通話とか、Zoomに興味があるという回答がありまして、皆さん結構、興味を持たれているんだなと思いました。
- ・「伊那シニアズーム倶楽部」を立ち上げた経緯は？

→（藤井シニア活動推進コーディネーター）

11月に開催したスマホセミナーへ参加したシニアの中から「Zoomでホストになる方法を知りたい」という声がありました。また、私自身、これまで対面で行ってきたイベントの代わりにオンライン講座を企画したとしても、実際にオンラインで参加できるシニアが少ないということを感じていました。私も最初、Zoomはとても難しそうと思っていましたが、利用してみたらそうでもなかったもので、まずは、その最初の取り掛かりの部分を一緒に勉強してみようというのが立ち上げた経緯です。昨年11月末から参加を呼び掛けました。
- ・どのような呼び掛けをしましたか？

→（藤井シニア活動推進コーディネーター）

シニア大生やシニア大OB、賛助会の皆さんに通信を送りました。現在、29人が登録しています。
- ・どのような活動から始まりましたか？

→（藤井シニア活動推進コーディネーター）

初心者の方ばかりだったので、使えるように導入する（ダウンロード、インストール）ことを説明するために、伝わりやすいように工夫したマニュアルを作りまして、メールで送信しました。ダウンロードとインストールができたところで、使い方に慣れてもらうようZoom体験会を3回ほど開催しました。
- ・やってみて何か発見は、ありましたか？

→（藤井シニア活動推進コーディネーター）

最初は、シニアの分からない点が、不明な状況でしたが、一緒になってやっていくうちに、「間違えてもいいから、とにかくいろいろ押してみたら良いよね」とか、「ズーム倶楽部が楽しくてオンライン参加だけど今日は、お化粧しちゃったんだよね」とか、皆さん楽しんで参加してくださっていることが良く分かりました。
- ・ズームを理解した人が、他の分からない人に教えることもあったそうですね。

→（藤井シニア活動推進コーディネーター）

バーチャル背景に皆さん興味を持たれて、自分の好きな写真をバックにしている方や、ヤシの葉が揺れている動画をバックにしている方もいて。興味を持った人がその人に教えてもらう、お互いがサポートできるようになってきました。

- ・それでは、飯伊支部の今村シニア活動推進コーディネーターをお願いします。飯伊学部では、既に3年ほど前から、課外授業ということで、スマホ講座を取り入れてきたということですか？
→（今村シニア活動推進コーディネーター）

活動自体は、2年前からですが、3年ほど前に入学してきたシニア大生（39期生）の班活動から、2年生になるとグループ活動に移りますが、あるグループが社会参加活動ではないですが、自分たちの情報交換や情報発信ツールとして、ホームページを立ち上げたいという相談がありました。ただ、ホームページは、一方通行になりやすいので、双方向のものFacebookなどのSNSを使ったらどうかという提案をしました。ちょうどシニア大OBで2年先輩の方が、当時、同じような相談をして、Facebookを立ち上げていましたので、その方を紹介しました。SNSを使う上で一番気をつけたいいけないのは、危険性ですので、Facebookは自分の名前も公表しているし、友達も限定できるので、Facebookを薦めました。

39期生の方が、卒業後、賛助会に入って、賛助会活動の「学びあい講座」で、スマートフォンをお互いに勉強しようと企画しました。今年度も講座をやるうとしていた時にソフトバンク株のスマホセミナーの話があり、渡りに船ということで、セミナーを開催しました。

- ・賛助会の会員交流にうまく結びついたという話ですね。

→（今村シニア活動推進コーディネーター）

飯伊は、「出会い、触れ合い、学び合い」をテーマにしていますので、お互いに教え合う学び合いを基本としています。

- ・今後の可能性は？

→（今村シニア活動推進コーディネーター）

コロナ禍でオンライン会議が非常に増えていますが、飯伊場合は、外部の団体も含めてオンラインによるつながりができていますが、初めて出会う方とは、やはりリアルに会えるオフ会の場をコロナが明けたら、しっかりとやっていきたいと思えます。さらに高齢者の方には、Facebookでも追悼アカウント（亡くなった後にどう処理するかというのをあらかじめ設定できる）機能がありますので、終末期のデータの取扱いについて勉強していく必要があると考えています。

- ・戸田シニア活動推進コーディネーターの発想から始まったスマホセミナーですが、県内各支部で取組が行われました。このような状況を課題も含めてどのように受け止めていますか？

→（戸田シニア活動推進コーディネーター）

セミナー等を企画するに当たり、ニーズのあるところにプログラムが生まれると思っていますので、シニアのつぶやき、シニアの傾向を私たちシニア活動推進コーディネーターは、アンテナを高くしています。藤井コーディネーターと今村コーディネーターも話していましたが、元々人間関係のつながりができているところにオンラインをツールの一つとして取り入れることで、シニアの皆さんの日常生活が豊かになる可能性やコロナ禍での不安を取り除いて安心して暮らせる可能性があると感じています。

(2) **事例2** オンラインを活用したネットワーク会議について

○ 発表者

- ・社会福祉法人小布施町社会福祉協議会生活支援コーディネーター 伊藤 由花 氏
- ・公財団法人長野県長寿社会開発センターシニア活動推進コーディネーター
(長野支部) 齊藤 むつみ 氏

○ 内容

- ・齊藤シニア活動推進コーディネーター、ネットワーク会議をオンラインで行ったということですが、そもそもネットワーク会議とは、どういうものですか？

→ (齊藤シニア活動推進コーディネーター)

私たちシニア活動推進コーディネーターは、高齢者に関わる関係団体の皆さんと連携や協働により、シニアの活躍の場を創出し、社会参加につなげていくことを日々行っています。関係団体の皆さんと連携を深めるため、ネットワーク会議を毎年行っています。

- ・ネットワーク会議をオンラインでやることに抵抗感はなかったですか？

→ (齊藤シニア活動推進コーディネーター)

県社会福祉協議会から各市町村社会福祉協議会にタブレット端末が会議用に配布されたという情報をいただきまして、市町村社会福祉協議会の担当者に「使いこなせていますか」と聞いたところ、「実は、今までオンラインの会議をやったことがないから使っていないんだ」と返事がありました。コロナ禍で従来の会議もできない中、オンライン会議を「ぜひ一緒にやってみましょう」と提案しました。

事例1の発表にあったようにシニアの皆さんは、気軽につながる手段として、オンラインに興味を示しています。それを実感したエピソードとして、あるおじいちゃんが、看板の表示「Zoom 会議」を見て「なあ、200m (メートル) 会議って何だい？」と質問しました。これをきっかけに私たちは、この会議を「200m会議」というネーミングにしました。

シニアの皆さんにオンラインを勧める前に、支える側の私たちが、慣れないといけないよねということで、関係団体の皆さんと情報交換をしながら、オンラインのスキルを私たち自身が高めていこうというところから始めました。オンラインでは、リアルと違って相手の反応がなかなか分かりづらいため、リアクションを大きくするとか、OKサインを出すとかルールを皆さんで共有しながら気軽に会議ができるよう進めました。

- ・オンライン会議の開催に当たって、協力してくれるスタッフはいたのでしょうか？

→ (齊藤シニア活動推進コーディネーター)

長寿社会開発センターには、シニア活動推進コーディネーターも含めたオンラインに強いスタッフがいて、情報を共有してもらいました。お互い学んだことや実際にやってみて失敗したことも含めた経験を共有して、会議の開催に活かしました。

- ・この1年間培ったスキルや関係性をどのように発展させていきたいですか？

→ (齊藤シニア活動推進コーディネーター)

先ほど今村コーディネーターからも話がありましたが、オンラインのスキルは保ちながらリアルに会うことも欠かせないものだと思いますので、うまく組み合わせながら、私たちのネットワークを広げていきたいと思っています。

- ・次に伊藤さん（小布施町社会福祉協議会）お願いします。伊藤さんは、どのような立場でオンラインネットワーク会議に関わったのですか？
→（伊藤氏（小布施町社会福祉協議会）
私は、生活支援コーディネーターとして、地域の生活支援やお茶のみサロン等の顔の見えるつながりのお手伝いをしています。コロナ禍で集まることができないし、学ぶ機会もないととても不安を感じていたところにオンラインネットワーク会議の話をいただいたので、うれしかったです。

- ・伊藤さんは、Zoomとかオンラインに慣れていましたか？
→（伊藤氏（小布施町社会福祉協議会）
私は、コロナが流行する前にオンライン研修を受講したことがあったのですが、使いこなせるような状況ではなく便利だけれどあまり馴染みのあるものではなかったです。

- ・実際にやってみて、苦労したこと、困ったことはありましたか？
→（伊藤氏（小布施町社会福祉協議会）
まず画面にどう向き合えば良いか分からなかったです。みんな画面に横並びでこちらを見ているので、目をそらすわけにもいかないし、どういうふうに相づちを打ったらいいのかというのが、最初は、戸惑いました。

- ・相づちやリアクションの取り方に工夫したことはありましたか？
→（伊藤氏（小布施町社会福祉協議会）
斉藤コーディネーターからオンライン会議のルールを資料として提供いただいたので、それをやってみました。分かるときは、大きくうなずいたり、見える形（○・×を作る）で意思表示をしました。

- ・顔を合わせるリアルな会議との違いは？
→（伊藤氏（小布施町社会福祉協議会）
オンライン会議は、一度に複数の方が参加できてスピード感を持って情報共有ができることや、一つの画面に対等に並んでいるため、フラットな横型のつながりが築ける（リアルな会議は、席の位置（上座・下座）を気にしないとイケない）ので、慣れてくれば発言もしやすくなると感じました。

- ・伊藤さんは、福祉分野で働いていますが、地域福祉という視点で考えたときにオンラインは、どのような可能性があると思いますか？
→（伊藤氏（小布施町社会福祉協議会）
地域の方たちが、「足が弱くなったからもう出られない」とおっしゃるのですが、体が不自由になっても、移動手段がなくても、お家にインターネット環境があれば会いたい人に会えるのではないかと思います。直接会うことが難しくて孤立になる方にとっては、顔を見ながら会話できることは、とても元気が出るし、生きがいにもつながります。馴染みの場所で自分らしく最後まで生きるということを私たちは、応援したいと思います。オンラインは、そのための有効な手段ではないかと感じています。

(3) **事例3** うすだワールドカフェ（地域の対話の場）について

○ 発表者

- ・橘倉酒造株式会社 会長 井出 民生 氏
- ・公財団法人長野県長寿社会開発センター シニア活動推進コーディネーター
（佐久支部）橋本 昭弘 氏

○ 内容

- ・橋本シニア活動推進コーディネーター、うすだワールドカフェですが、これはまちの縁側講座が出发点ということですが、縁側講座とは何ですか？

→（橋本シニア活動推進コーディネーター）

縁側講座は、佐久支部では、4・5年ずっと続けているものですが、まず縁側の視点（高齢者が集まっている場所、子どもたちが集まっている場所）を講義で学んでいただいて、その視点で町を歩いていただき、最後にみんなで共有します。地域のヒトやモノやコトを発見する講座です。

- ・縁側講座で出会った人たちに集まってもらって、うすだワールドカフェを開催することになったわけですね。

→（橋本シニア活動推進コーディネーター）

はい。住民主体の思いを大切にしながら地域活動を根付かせていきたいと思っていましたので、まず、臼田のレジェンドと言われる方々に集まっていただいて顔の見える関係づくりから始めました。地域に対して感じていることや、やりたいとを共有する中で、うすだワールドカフェの開催につながりました。

- ・どのような話合いが行われたのでしょうか？

→（橋本シニア活動推進コーディネーター）

まず「10年後の臼田をどんな地域にしたいか」について、話し合いました。次に高校生と住民が一つになって何か協力できることはないだろうかという視点で対話をしました。

話し合いにより、佐久平総合技術高等学校で「絶品うまいもの甲子園」に出場して「ライスバーガー」を作る企画に食生活改善推進員さんにご協力いただいたり、JA 佐久浅間女性部の協力を得て、甘露煮作りをしたりといろいろな企画が生まれました。

そして、橘倉酒造（井出会長）の甘酒作りにつながります。佐久平総合技術高等学校の生徒が作ったお米を使って、地域の醸造所と連携して甘酒を造ってみようという発想が生まれたのです。今年、初めて造りまして、600本の甘酒ができました。

- ・それでは、井出さん（橘倉酒造）、お願いします。井出さんは、まちづくりグループ「うすだ未来21」の代表をされていますよね。

→（井出氏（橘倉酒造））

会社は、商工会とかどうしても、ある程度の縦割りの組織の中で動いていましたので、「うすだ未来21」は、縦割りの関係は全くなく、老いも若きも、男も女も、あるいは業種を超えて、いろいろな人たちが集まりました（40名ほど）。

- ・「うすだ未来 21」の代表として、うすだワールドカフェに深く関わる中心人物とお聞きしましたが、うすだワールドカフェは対話を非常に大事にするんですね。
 - （井出氏（橘倉酒造㈱））

橋本社会活動推進コーディネーターのお話のとおり、いろいろな方が集まると、いろいろな対話が生まれて、そしてお互いがそこから汲み取るものを共有していくプロセスがあります。今回の甘酒造りもアイデアとして出てきましたし、集まった人がどういうことができるか、主体的に考えるようになりました。

- ・うすだワールドカフェは、対話をとても大事にするということですが、対話の意味をどのように捉えていますか？
 - （井出氏（橘倉酒造㈱））

この地域をこれからどうするのか、10年後どうなるんだとか、皆さんそれぞれは、考えているのですが、どうしても自分の考えで止まっていたり、あるいは、自分が関わるグループだけで終わっています。もう少しそこを打破して、みんなで共有していく意味で対話は、非常に大事だと思います。

- ・対話から生まれた甘酒造りの商品化ということですが、高校生と一緒に取り組んで良かったと思うことは？
 - （井出氏（橘倉酒造㈱））

私たちは、日常で高校生と接する機会が少ないですが、臼田には高校がありますし、農業について学んでいる生徒たちが良いお米ができたという話を聞いたものですから、私たちがお酒を造る上でも地域のお米を使っていますので、甘酒造りを通じていろいろな交流が生まれました。

- ・橋本活動推進コーディネーター、うすだワールドカフェの今後の方向性は？
 - （橋本シニア活動推進コーディネーター）

今までは、シニアの集まりやすい時間帯や高校の授業の一環としてやっていたので、オンラインで実施してみたいです。土曜日の午前中とかにオンラインで開催し、働いている方や子育て世代の方、いろんな世代の方にご参加いただいて、今回の佐久平総合技術高等学校の甘酒造りのことを話題に入れながら、多世代での対話をしたいと考えています。

- ・橋本シニア活動推進コーディネーターは、コロナ禍でリアルとオンラインのハイブリット方式のフォーラムを幾つか企画されましたよね。やってみての成果や課題は？
 - （橋本シニア活動推進コーディネーター）

ハイブリットなので技術的に苦労しました。オンラインと並行して会場に集まっている方にどう伝えていけるか。従来の顔を合わせたリアルな話合いなら、テーマに沿って、参加者の皆さんが考え、具体的にやってみたいことのアイディアや気づきが出てくるんですけど。テーマに対して深く突っ込んだ話合いができなかったことは、大きな課題です。

一方で、東京や松山の方に講師をお願いしてフォーラムを開催しましたが、オンラインは、時間、空間を超えてみんなで集まれることは、非常に面白いと感じました。

- ・時空を超えてコミュニケーション、学びが可能になるということですね？
→（橋本シニア活動推進コーディネーター）
そうです。新たなつながりという意味では、面白い企画になると感じています。

2 ワークショップ（旗揚げ方式ディスカッション）

※ 選択肢に正解・不正解はない。設問に対して、参加者が意思を示し、お互いの気持ちを共有することで、自身の今までの在り方をもう一度見つめ直し、今後どうしたら良いかを考えるきっかけづくり。

(1) 【設問1】事業実施に当たって、あなたはコロナ禍をどのように受け止めましたか。

選択肢	回答率
① どうなるか、先が見えずとても不安だった（うろたえた）	38.3%
② これまで通り実施ししなければと思った（使命感）	6.4%
③ 事業実施のために、積極的に工夫しようと思った（燃えた）	34.0%
④ 危機感をあまり感じなかった（他人事）	8.5%
⑤ その他	12.8%

（各選択肢を選んだ理由、感想等）

① どうなるか、先が見えずとても不安だった（うろたえた）

- ・地域活動の場所の提供と地域活動のサポートをしているが、コロナ禍で地域活動の自粛でどう活動すれば良いか、みんな悩んでいた。私たちも初めての状況で、正解が見られず、ずっと悩んでいた。

② これまで通り実施ししなければと思った（使命感）

- ・ふだん、お年寄りと関わっていて、コロナで事業が止められることが多い状況で、お年寄りが家に籠ってしまうとフレイルになってしまう。だから何とかやろうと頑張った。感染予防に気を使いながら、お年寄りの体操クラブをやりました。

③ 事業実施のために、積極的に工夫しようと思った（燃えた）

- ・いろいろな関係者がいるので、自分で考えることができなくても情報を得て、みんなと共有した。
- ・情報収集しながら、Web を使うことも考えながら、先頭を切ってやらなければと思っていました。

④ 危機感をあまり感じなかった（他人事）

- ・うろたえたのも、使命感に燃えたということもなく、どちらかといえばなるようになるかなという気持ち。市対策本部の指示に従ってやっていけばいいかなという感じ。

⑤ その他

- ・市役所なので、「できることはできる、やれることはやろう、できないことは仕方がない」という気持ちで、できることだけは、頑張っている。
- ・不安だったけど、何とかしないといけない。
- ・これまでどおりやらなければならないこと、工夫してやらなければならないこと、で

きないことがあって、すごく戸惑った。

(2) 【設問 2】 コロナ禍での事業実施に当たって、何を重要と考え、どのような行動を起こしましたか。

選択肢	回答率
① 正しい知識を得るため、学習の機会を持った	4.3%
② これまでのネットワーク・関係を活かして情報収集をした	23.9%
③ 話し合いを重ね、可能な予防対策をして事業を進めた	43.5%
④ 感染拡大を防ぐため、休止・中止した	19.6%
⑤ その他	8.7%

(各選択肢を選んだ理由、感想等)

① 正しい知識を得るため、学習の機会を持った

- ・人を集めて何かやる時は、どうしても感染対策を講じなければならない中で、コロナに関する情報量がすごく多くて、どんな対策をすれば良いかというのが分からなかったので、正しい知識を得るために学習した。
- ・就労支援のイベントを年4回企画していて、コロナによりイベントの開催をどうするか考えたときに「不要不急」という言葉を良く使うけれど、来られる皆さんにとっては必要で、時間的にも迫られている中でやらざるを得ないと感じていた。市としても、イベント全てが中止ではなくて、できることはやって経済を回すという方針を打ち出したので、Zoom やコロナ対策の勉強をして、やり方を考えて開催した。

② これまでのネットワーク・関係を活かして情報収集をした

- ・公民館の仕事をしているので、いろいろな事業を計画していても、結局、町の対応によって、休止になったり、縮小したり、いろいろな状況変化があった。できるだけ何とかしたいということで、情報収集をした。
- ・近隣市町村社協とのつながりがあるので、コロナ禍でどのような活動をしているのか、情報収集をするとともに、自分たちの活動を YouTube で動画配信するなど情報発信に努めた。若手職員は、コロナ禍で怖がって何でもすぐに中止しようとしていたが、コロナ禍でもやっていくことがある、工夫すればできることがあるんだよと伝えている。
- ・コロナ禍だからこそ、できることを情報収集して、ホームページで発信した。

③ 話し合いを重ね、可能な予防対策をして事業を進めた

- ・人材育成の研修会を実施しているが、コロナ禍で対面方式での研修が難しい中で、どのように開催していくか、対話を重ね、インターネット上で受講生と講師がやり取りできる仕組みなどを考えて、実施した。

④ 感染拡大を防ぐため、休止・中止した

- ・コロナのため、中止した。

⑤ その他

- ・市のシニア大学を今年度担当する予定だったが、コロナ禍で中止となった。一律に中止としたわけではなく可能な予防対策をして単発で行った。
- ・今年度4月に異動してきて、担当する事業が理解できないままコロナになって、いろいろな人がいろいろなことを言うけれど、それが日本語のように聞こえない状況だった。ただ、自分事として捉えて動かないといけない状況だったので、半年経って、主体的に動こうと頑張っている。
- ・保健福祉事務所で高齢者施設を担当していて、昨年の2月からずっとコロナ対応で、高齢者施設の職員や業者に陽性者が発生したら、どういう行動をとれば良いのか、全然分からない、手探りの状況だった。
- ・情勢に応じて、実施できることは何かを決めて、対応していた。

(3) 【設問3】 コロナ後の事業実施について、どう考えますか。

選択肢	回答率
① 従来どおり実施する	4.5%
② これまでの事業内容を見直し、オンラインの活用など実施方法工夫する	54.5%
③ 多様な機関・事業所・団体との日常的なネットワークや関係づくりを充実させる	25.0%
④ コロナ禍から生まれた新たな課題に対処するため、新規事業を立ち上げる	9.1%
⑤ その他	6.8%

(各選択肢を選んだ理由、感想等)

① 従来どおり実施する

- ・設問の「コロナ後」というのが、コロナが明けた後だとすれば、講演会などは、やはりリアルでやるのが一番理想。今、新しい時代の流れの中で、オンラインを活用しているが、Zoomだと迫力がないし、話がなかなか伝わりづらい。やはり今まで良かったものは、もう一度復活させていきたい。

② これまでの事業内容を見直し、オンラインの活用など実施方法工夫する

- ・コロナを良い方向に活かしていきたい。私たちの団体は、会議をやるのが仕事みたいなところがあって、県内から毎月50～60名が集まってくる。オンラインでできる会議もあるので、上手に活用していきたい。
- ・オンラインを活用することで、研修会の講師として遠方の方にお問い合わせできたり、足がなくて運動教室に来られない方も一緒に参加でき、オンラインに可能性を感じている。
- ・コロナにより、考え方が変わった。Webを活用するようになったし、新たに取組んだこともたくさんある。良いところを取り入れながら前向きに進めていきたい。
- ・今日の事例発表を聞いて、オンラインの活用などいろいろなことに対応できるような仕組みを考えていかなければならない時代になっているということを感じた。
- ・老人クラブだから、老人大学だからこういうことをやらなければいけないということではなくて、地域の課題を新たに見つめ直して、課題に向き合い縦割りを越えて取り組んでいきたい。

③ 多様な機関・事業所・団体との日常的なネットワークや関係づくりを充実させる

(発言者なし)

④ コロナ禍から生まれた新たな課題に対処するため、新規事業を立ち上げる

- ・コロナが収束しても同じような状況生じるかもしれない。それに向けて、何か新しいつながりを作る必要がある。具体的な新規事業はないが、必要性を感じている。
- ・コロナでいろいろなイベントが中止になった。継続しなければならないという気持ちでやっている事業もあって、時代のニーズに合っていない事業が結構あったのではないかと感じている。コロナ後は、事業を見直してニーズに合わないものはやめて、本当に必要なものは、時代に合わせた新たな形でやっていけたらと思う。
- ・コロナから得たものがある、日本は経済成長のため、進んできたが、進んだ方向が果たしてどうだったのか、もう一度振り返るところに私たちは、いるのかもしれない。自分の事業については、地域の酒屋が、地域のために何ができるのか、何が必要とされているのかを真剣に考えていきたい。そのためには、旧来の延長線だけでは難しいと思うので、新しいことをしなければならない。それには、いろいろな方のお知恵や連携を大いに活かさせていただいて、頑張っていきたい。

⑤ その他

- ・選択肢のどれもやらないといけないと感じているため、選択肢を決められなかった。
- ・事業の目的、内容、性質で変わってくるため、選択肢のどれになるかは決められないが、コロナをきっかけに事業を見直す必要はあると感じている。
- ・保健福祉事務所の使命は、コロナの抑え込みが最優先であり、他の事業は、コロナの抑え込み次第。個人的にシニア大学については、来年度も感染が拡大した場合は、オンライン授業が受けられたらと思う。